

「霊長類の知性の進化と発達」

友永雅己

(思考言語分野・思考言語分科)

私たちヒトは、今から約 500 - 600 万年前にチンパンジーとの共通祖先から枝分かれしました。ヒトは、このような長い進化の過程を経て今ここに存在しています。体の形が進化の産物であるのと同じように、私たちが示すさまざまな行動やさまざまな知性も、このような長い進化の過程を経て形成されたものであることは間違いありません。「ヒトのこことは一体なものか」。この問いに答えるためには、私たちの知性が「どのように」働いているかという "how" の問いかけだけでなく、「なぜ」そのように働くのかという "why" の問いかけが必要です。さらにこれらの問いかけには、知性の発現である行動の直接的な原因(至近要因)を探るだけでなく、なぜ、どのように、そのような行動が進化してきたのかという進化上の原因(究極要因)を探る必要もあるでしょう。「われわれのこことはどのように進化してきたのか、そしてそれはなぜか」。このような問いかけに答えようとする学問が「比較認知科学」です。

進化という時間軸とは別に、私たちは生まれてから死ぬまでという長い時間をかけて成長し、こころを発達させていきます。胎児期に始まり、新生児期、乳児期、幼児期を経てヒトの心は完成していきます。この個体発生という時間軸を通して、こころがどのように変化(発達)していくのか、そしてなぜそのように変化していくのかを問う学問が「発達心理学」といってよいのでしょうか。そして、ここにも how - why という 2 つの問いかけと至近要因 - 究極要因という 2 つの答え方があるはずで、完成した(あるいは成熟した)ヒトのこころというものが進化の産物であるならば、完成にいたるプロセスも進化の産物なのです。したがって、「なぜそのようにこころは発達していくのか」という問いに答えるためにも、進化的な視点は必須であると考えます。「比較認知発達」と呼ばれる研究領域は、系統発生と個体発生という 2 つの時間の糸を紡ぎ合わせることで心の進化をよりダイナミックな形で捉えようとしています。

今回の講義では、ヒト以外の霊長類との比較を通して、ヒトの心の進化や知性の多様性を探ろうとする「比較認知科学」・「比較認知発達研究」という研究領域について、本研究所で行われているチンパンジーでのさまざまな研究を紹介しつつ俯瞰したいと思います。

<参考文献>

- ・松沢哲郎 (2000). チンパンジーの心. 岩波現代文庫
- ・松沢哲郎 (2002). 進化の隣人 ヒトとチンパンジー. 岩波新書
- ・友永雅己・松沢哲郎 (2001). 認知システムの進化. 乾 敏郎・安西祐一郎(編) 「認知発達と進化」(認知科学の新展開 1), pp.1-36. 東京: 岩波書店.
- ・友永雅己 (2003). 霊長類の知性とその起源 比較認知科学からのアプローチ. 京都大学霊長類研究所(編) 「霊長類学のすすめ」, pp.87-105. 丸善.
- ・友永雅己・田中正之・松沢哲郎(編著) (2003). 「チンパンジーの認知と行動の発達」. 京都大学学術出版会.